

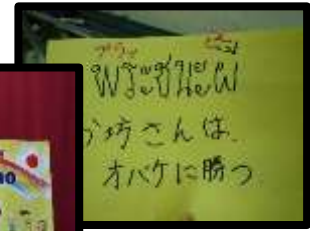
# SGH タイ研修 2015 報告書



○パヤオセンター内での活動



ウェルカムナイトの様子



スポーツ交流会



集団登校の様子



食後の食器洗



○パヤオセンター内・フェアウェルナイト



ミサンガの作り方伝授



昔の遊び



センターの子供たちによる踊り



センターの子供たちによるタイ語と日本語での歌



○パヤオセンターの職員を交えた総括



○Mae Ta Chang Village ・ メータチャン村



伝統衣装体験



上から見た村



家の中の様子



村の様子



歓迎会での伝統的な儀式



村の子たちによるダンス



村の子供たちとのふれあい



鶏の調理



村の夕食





村の方による学習会



村での炊事



村の子どもたちと



さよなら式

## I. パヤオセンターの活動について

### □ ライフスキルトレーニング

料理・洗濯・掃除・などの日々の生活を学ぶことや、農作業やハンディクラフトに取り組むことで、自分の身を守り自立するためのスキルを身につける。

### □ 子ども議会の活動

委員は選挙によって選出される。一ヶ月に一度会議を行い、農業・レクリエーション・宿泊（ゲストハウスなど）・食事・掃除などの五つの部門に分かれて運営される。議会を通して民主主義について学ぶ（ex.議長を選出，討論，多数決）。

### □ ハンディクラフト

村の女性たちや、パヤオセンターの子どもたちが生産している。センター周辺地域に住む、知識がなく仕事につけない人々の収入向上につなげるため。

### □ 知識トレーニング

子どもを性産業・商業および、人身売買から守るため。子どもの権利や基本的人権などの知識を普及するため。

### □ キャンペーン活動

センターに通っていない子どもたちに正しい知識を普及するために、センターの子どもが行う（ex.子どもの日のパレード）。少数民族が多い学校に訪問している。

### □ 家族への支援

- ・ カウンセリング
- ・ ワークショップ
- ・ ライフスキルトレーニング
- ・ 知識トレーニング

### □ スタディーツアー



## II. センターの子どもたちとの意見交換会（9/27 実施）

### Q 1. 自分以外の民族に対してのイメージはあるか？

- A. 人それぞれ性格が違うから、特に民族に対してのイメージはない。ただしタイ社会の中には、「山の人は麻薬に関わっている」というイメージを持っている人もいる。

- Q 2. 日本人に対してのイメージは何か？  
A. 物静かな人が多い。規律正しい。時間を守る。
- Q 3. 自分の文化を大事にしようという意識はあるか？  
A. 文化を守りたい、伝えたいという気持ちはある。新年などの行事だと、民族の衣装を着て他の村に出かけたりする。
- Q 4. 自分がタイ語を話せるのに、親族にタイ語を話せない人がいることをどう思うか？  
A. 学校に行っていないなどの理由から、話せなくても普通である。共通のタイ語は学校で習う。山岳民俗の自分たちのタイ語は訛<sup>なまり</sup>があって、ちゃかされたりもするが本気で馬鹿にされているわけではないので嫌な気持ちにはならない。

### Ⅲ. メータチャン村 意見交換 (9/27・28 実施)

- Q 1. 子どもをパヤオセンターに預けるのはどんな気持ちか？  
A. 学校に子どもにはなかなか会えなくなってしまうけれど支援していただけて嬉しい。
- Q 2. 村にあつたら助かるものは何か？  
A. 電気や舗装された道路。村は太陽光発電しかなく電力供給が不安定な状態。また道路は雨季になると車で登れなくなることが多い。
- Q 3. 他の民族を嫌だと思ったりするか？  
A. 個人によって性格は違うので民族の違いで好き嫌いはない。
- Q 4. 山岳民族だからという理由で就職しにくいということはあるか？  
A. 就職する時に民族は関係なく、その人の能力次第。
- Q 5. 国籍が無くて不便だったことはあるか？  
A. 国籍が無いと病院に行った際保険が効かず、全額自腹で払わなければいけないので不便。
- Q 6. タイで無宗教の人はいるか？  
A. タイの人はみんな宗教を信仰している。でも無宗教の人を悪く思ったりはしていない。
- Q 7. 出稼ぎに行くときはどのような仕事をしていたか？  
A. 建築をしていた。
- Q 8. 都会のような便利な場所に住みたいと思うか？  
A. 思いません。バンコクに行った時は人が多くて息が詰まりそうだった。
- Q 9. 村に住んでいて良かったことは？  
A. 節約できること。





Q10. タイの政治や経済状況に関心はあるか？

A. 政治にはあまり関心がない。いつもバイクを使っているので、ガソリンの値段など、経済状況には関心がある。

#### IV. センター職員を交えた総括（9/29 実施）

私達は5日間センターや村で学んだこと、感じたことを最終日のミーティングで話し合い、自分たちの意見を一人一人述べた後、センターのスタッフの方や通訳の川口さん、江口先生から貴重なお話をしていただいた。

<センター長ノイさん>

人間本来の目的とは、どうすれば精神的な豊かさを見いだせるかである。しかし現代の私達にとっては物質的な豊かさを求めてしまうものが多くあるため精神的疲労につながり職場や学校、近所などでの人間関係、家庭内の暴力につながってしまうことがある。センターで大切にしていることは、子どもたちに自分の文化や自分自身の大切さを教えるということ。子どもたち一人一人の個性・自信・価値を大切にし、自分は決して劣っているわけではないということ、またこのようなことを年上の子たちが年下の子たちに伝えていく。そして、子どもたちが色々な行事をみんな参加することで様々な背景を抱えながらも自分の価値を知り、心の傷を癒しながらも周りの人に手を差し伸べ自分は社会のために何ができ、どう関わられるかを考えていく。

<エークさん>

私達にとって最も重要なことは、自分のおかれている状況を理解し、他人と比べるのではなくそのままの自分のレベルや環境に合った選択をして“幸せ”を感じるということ。自分の「足るを知る」。これは自分に合った選択をしたからといってそこで妥協するのではなく、物質的な欲求と精神的な欲求とのバランスを保ちながら、成長する機会があれば成長していくという意味。たとえ文化が違って、誰もが求めているのは“幸福”であり、自分にとっての幸せとは何かを見つけていく上で人のことをもっと考えられるようになれば、周りの人の幸せが自分の幸せにつながっていくはず。これからの子どもたちは、進学するにつれて自分の生き方について考える機会が増えていくが、そういったなかで社会や周りの人に目を向けていくことが大切である。

<川口さん（通訳）>

自分が誰かに何かをしてもらって恩返しをしたいと思っても、色々な事情でもうその人には直接恩を返せないがある。その時別の人に自分が恩を送るということを“恩送り”という。センターで会った子どもたちに直接恩を返せなくても他の人、

周りの人を大切にし、このセンターで感じたことを感じただけで終わらずこれからも考え広めていくことが大切である。

<江口先生（引率）>

私がセンターで一番学んだのは、自分自身で変えることが開発ということ。このセンターで考えたことを自分だけのものにしない。このセンターで経験したことを日本に帰って広めるのは自分自身がどう行動するかで変えていける。自分で道を開いていくことでどんな方向にも行けることを自覚し、生きていってほしい。

## V. 感想

### 3年B組 生徒A

幸せとは何か。この研修で私が一番考えたことです。私の日本での暮らしは便利で、生活面では困ることはありません。電気があって、電車があって、携帯があって、いつでも人と繋がることができます。それが当たり前です。



しかし、今回訪れたメータチェーン村は、電気がほとんどなくて、電車なんてあるわけなくて、携帯は電波がないから持っていない。それが当たり前でした。私の非日常を日常として生活していました。電気がないことは事前学習で知っていたはずなのに、机の上の学習だけではどこかリアリティーがなく、驚きもしていなかったのに、実際に行くと非日常観に驚きを感じることはばかりでした。

センターの子どもたち、村の方々、センターの職員の方々とお話をし、慶祥生が思ったこと・感じたことを素直に話し合っ…そんな時間を過ごして、日本に帰って来た私が感じたことは、「便利」ということが必ずしも「幸せ」と結びつくものではないということです。そして豊かとは、二種類あるのではないかと思います。

私は持っているものという点で見れば、きっと村の方々よりは豊かで便利です。でも逆にその豊かさが自分の生活を縛り付けているのかもしれないと、村に行って感じました。科学技術が発展して、学校や会社に縛りつけられれば、それだけ排他的になり、人との繋がりが薄くなっています。村は、行事も、家を建てるのも、全部村の人全員が協力して行っているそうです。そしてそれを「幸せ」と言っていました。便利ではなくても、全員で協力すれば家だって建てられる、それを「温かい」と感じました。

そしてもう一つ、タイの方が「豊か」なことを考えた時に、表情が豊かだ、と感じました。センターの子どもたちは、みんなきらきらとした笑顔で私達を迎えてくれました。村の人たちもそうでした。日本で感じる愛想笑いか、ポーカーフェイスとかが必ずしもタイにはないとは言えませんが、そのような「作った表情」ではなく、み

んな本気で喜怒哀楽を表していました。それが、本当は当たり前なのに、すごく新鮮で、心に染みしました。

最後に、私がこの研修の中で一番心に残った言葉として、センターのノイ所長が言った、「自分の身の丈にあった幸せ」という言葉があります。私は実はまだ何も持っていない、そう感じたタイ研修でした。そんな私は今日本で、自分の身の丈にあった幸せを探していきたいです。

### 3年C組 生徒B

村の方々との意見交換を通して分かったことが2つある。

1つ目は、村の方々には宗教の違いや民族の違いでその人のイメージを決めていないということだ。ぼくはこの村に来る前、違う民族や違う宗教を信仰している人の間で対立があるのではないかと想像していた。しかし村の方々にこの質問をしてみると、その人が好きか嫌いかは民族や宗教は関係なく、どのような性格なのかが大切なのだと答えていた。実際自分にも噂や見た目、宗教でその人がどんな人物なのか、勝手なイメージを持ってしまうことがある。だが、同じ宗教を信仰していても性格は同じではなく人それぞれ違うのだ。人のイメージを勝手に自分の中で作らず、実際に接してみると、とても大切だと分かった。多文化共生で1番大切なことは、民族や宗教、見た目の違いを考えず、その人がどのような人物なのかを理解し合うことだと思った。



2つ目は、便利であることが必ずしも幸せに繋がるわけではないということだ。日本はとても便利な国である。電気や水には全く困らないし、何か欲しいものがあればインターネットを使えばすぐに購入することができる。暮らしの中で不便だと感じることはあまりない。しかし村には十分な電気はなく清潔な水道はない。舗装された道路さえなかった。決して便利とは言えない場所で生活をしているのだ。僕はそのような村に住む人たちをかわいそうだと思ってしまっていた。だが一緒に生活してみると、自分の考えは間違っているということが分かった。村の方々は皆楽しそうに暮らしていて、村での生活が幸せだと言っていた。

僕たちは便利さを求めすぎているのではないかと思う。また、物欲を満たすことで幸せを感じてしまっているのではないか。村の方々のように、不便な暮らしの中から幸せを見つけていくことが大切だと思う。僕自身がどうしたら幸せを感じられるのか考え続けていきたい。

### 3年C組 生徒C

私達は主に山岳民族の学びを通して多文化共生について考えることを目的にタイへ行った。事前学習ではタイの山岳民族のことを学び私達の生活とはとてもかけ離れていることを知った。そのため、私は勝手に村の方々は毎日を必死に生きていて、幸せなど感じることもなく過ごしているのだと思っていたが、実際に村を訪れると私の想像とは違っていた。



村の方々はとても穏やかで楽しそうに生活していたため、少し不思議に思ったが、その後、村の方との話し合いで理由がわかった。確かに彼らは不自由なく生活できているわけではないが、私が思うほどそのことを問題視しておらず、そのなかでも幸せを見つけて生活していた。私達日本人がこの村で暮らすとなると多くの人が幸せを感じることはないだろう。私も、今回のホームステイは1日だったため楽しかったが、ここに住むとなるとかなり抵抗がある。同じ人間なのに幸せを感じる基準がこんなにも違うことがわかった。最終日にパヤオセンターのノイさんがおっしゃっていた「自分の基準で物事を考えてはいけない」という言葉が、このことからとても腑に落ちた。また、村での話し合いの中で私達がした他民族を嫌に思うことはないのかという質問に対して、村長さんが「少し下の村では2つの民族が混合して暮らしているところもあるようにお互い助け合って生きていくという思いがあるから、他民族の人が自分たちの村に入ってきててもなんとも思わない。」と言った。このことから山岳民族の人たちはアカ族、モン族というような集団で見ずに一人一人としてみているように感じた。私達は、「あの学校の人だから頭が良い。あの学校だから頭が悪い。」などいうように、人をある領域から見てしまいがちなのではないかと思った。

このことはパヤオセンターの子どもたちとの話し合いでも感じたことであった。私が他民族に対するイメージはあるのかと聞いたところ、当然のように「ない」と答えていた。世間の一般的な偏見は聞いたことはあるが信じておらず、民族のなかでも一人一人違うから「民族」に対してのイメージはないと言っていた。センターには様々な民族の子と一緒に暮らしているのにも関わらず、みんな楽しそうに暮らしているのは、一人一人（自分）を受け入れてくれるという環境があるからだと感じた。

この研修で一番感じたことは、これらのことで「幸せはひとによって違うものである」、「一人をその人がいる集団からみてはならず一人の人としてみる（偏見を持ってはいけない）」ということだった。あたりまえのことであるがその意味を見失ってしまいそうなことを考え直せた良い機会だった。

### 3年B組 生徒D

私は2015年の9月25日から9月30日にかけてSGHのタイ研修ではYMCA パヤオセンターで子どもたちと過ごし、山岳民族のアカ族が住むメータチャン村に1泊2日のホームステイをした。以下は私が研修で考えさせられた2つの出来事である。

以前アジア学で発展途上国にどのような支援をするべきかという題で授業が進められた。インフラ整備、起業支援、教育援助などいくつかの選択肢から重点的に取り組んでいく項目を3つ選ぶという内容であり、その選択肢の一つに『何もしない』という項目が含まれていた。当時の私は何もせずにただ成り行きに任せてしまうことは無秩序に国づくりがなされるのではないかと不安に感じ、『何もしない』という考えを支持しなかった。

山岳民族が住むメータチャン村にホームステイをして、民族衣装を着ることや村の集会で伝統舞踊を踊ることなど手厚い歓迎を受けた。私はホームステイをする前にメータチャン村の事前説明を聞いて、道路整備や電気設備のインフラが整っていないことを不便ではないかと感じた。しかし村に滞在すると互いに助け合いながら生きてきた村人の快活さや、自らの村を発展させようとする情熱が感じられて、不便な状況だからこそ村人同士で支えあいながら生きていくという考えを知れた。特に子どもたちとのふれあいは川で遊び、動物を追い掛け回すなどテレビやゲームに頼らずに自然を活用していて昔の日本の原風景を感じられた。

私はメータチャン村のホームステイを経て幸福の定義が大きく揺さぶられた。また、ホームステイ中に江口先生から聞いた話では世界一幸福な国であるといわれるブータンにも先進国から数多くの技術が流入して、ブータンの若者たちは幸福とはいえない状況だと考えているそうだ。私は先進国の支援が発展途上国の今までの生活の充足感を壊していると考え、『何もしない』という選択肢は発展途上国を支えてゆくなかで大切な考え方だと感じた。

YMCA パヤオセンターでの交流ではタイ国民の少数民族に対する思いを中心に話し合いをした。その中で少数民族の言葉の訛<sup>なまり</sup>をからかう人もいるが学校からは少数民族の子どもを大切にしていけるという指導がなされているため少数民族であるから冷遇されるということは起きていないという話があった。また、パヤオセンターでも少数民族の子どもがよく預けられていることから差別意識は存在しないという話もあった。私はあえて民族の違いを伝えることで少数民族でもタイでは重要な人々であり、尊重すべき存在であるということを認識させているのではないのかと考えた。日本では在日外国人や部落差別などの義務教育機関の指導が不十分であるがために差別意識が拭えないのだろう。日本はタイを見習って民族の違いに向き合い、互いを尊重していく考え方を身につけさせていくべきだ。

私はタイ研修を経てテーマである多民族・多文化共生のほかに豊かさの価値観の違いにも考えるようになった。この体験から国際化が進み続けていくなかでも豊か

さや他者の思想を受け止めて、技術的な発展ではないことを重要視した考え方をより身に着けていきたいと思った。

### 3年C組 生徒E

高校2年の海外研修でベトナムへ行ったとき、日本ではここにはないものが当たり前のようにあり、自分は恵まれている側にいるということに自覚しました。そして、日本に帰っても当たり前のことを当たり前と覚えてしまわないようにしようと決心しました。しかし、今回のタイ研修で私は大きな勘違いをしていたことに気づかされました。

タイで過ごした5日間は、毎日が充実していました。日本での生活に比べ、不自由なことが多い生活でしたが、私は毎日とても満たされていました。日本ではあらゆるものの機械化が進み、便利になり生活の中での身体的苦痛を感じることはほとんどなくなりました。また、多くの人々が食べ物に困ることなく、身の危険を感じることなく安心して暮らすことができます。去年の私は、この「生活の豊かさ=生きる上での豊かさ」だと思い込み、日本は恵まれていると勘違いしていました。しかし、日本で何の不自由もなく幸せな生活を送っているはずなのに、常に空虚感や孤独感を感じている私達は、本当に豊かなのだろうか、と疑問を持つようになりました。そして、本当の豊かさとは、本当の幸せとは何だろうと考えるようになりました。

本当の幸せを考えるにあたって、自分が今当たり前だと思っていることは本当に当たり前なのだろうか、という観点から考えました。先進国と呼ばれる日本で生きてきた私は、より便利になることや発展し続けることの価値があると思っていました。しかし、パヤオセンターやアカ族の村で暮らす人々はそれが当たり前ではないことを教えてくれました。パヤオセンター統括ミーティングでの、職員のノイさんによる、とても印象深かったお話があります。

「人間は心の深いところで豊かになることを望んでいる生き物で、自分にとってちょうどいい豊かさが、人間の本来求めているもの。先進国では常に競争が起こり、心がどんどん削られていく。いつの間にか大事なものを見失ってしまっている。1番大切なことは心が満たされていることで、多くを望みすぎず身の丈にあったものを選ぶこと。」

この言葉を聞いて、物理的な豊かさを求め、競争を起こし、心が豊かでなくなってしまった私達よりも、身の丈に合う豊かさをを選び、心の豊かさを守ってきたパヤオセンターやアカ族の村の人々の方が、本当の意味で豊かだと感じました。自分が生きてきた場所から離れ、異なる背景の人々と関わることで、何の疑いもなく当たり前だと思っていたものがそうでなかったことに気付かされました。また、自分の価値観を見直し、本当の豊かさとはなにかを考え直すきっかけになりました。

### 3年C組 生徒F

2度目の北タイ訪問で、1度目の訪問ではわからなかったことを知ることができた。2年生の時海外研修で山岳民族の村へ行き、底が抜けそうな家や整備されてない道を見て、また日本に帰ってから電気を見たこともない中国の小さな村の子どもたちをテレビで見て、「かわいそう」という感情を持った。その時は大人数で行ったため質問もできず、また数時間の訪問であり、そして1番大切な、考えるということをしなかったため、その感情しか持つことができなかった。

しかし今回のSGHタイ研修で「かわいそう」とは思わなくなり、むしろ少し羨ましいとも思った。約2時間の意見交流やホームステイを通してたくさんのことを学ぶことができた。「かわいそう」と思っていたのは自分の基準をものさしにして、今の自分の日本での生活よりも遅れた生活をしていると認識したからであるとわかった。しかし、遅れていることは決して悪いことではなく、その代わりに彼らは精神的な豊かさを得ていた。日本の人は、恵まれた生活をしているがゆえにさまざまな欲望が生まれ、人の目を気にすることから来る見栄やプライドを大切にしている。実は心の中で1番求めている精神的な豊かさを忘れてしまっているのではないかと考えた。そして、そういった欲望が原因で、YMCAパヤオセンターが子どもたちを保護している理由にもなっている子どもの商業的性搾取の問題も起きてしまうのではないかと考える。精神的豊かさを得るには、人それぞれ求めているレベルの満足は違うので、自分にとって幸せとは何かを知り、自分の身の丈にあった豊かさを求める必要があることを学んだ。また、物質的欲求と幸せとのバランスが崩れることや、物欲のために生きて、それを追いすぎて疲れてしまうことで本来の幸せを忘れてしまうから、エークさんのおっしゃっていた「足るを知る」ということが大事なことだと思った。

日本にいてはこのようなことは考えることもなく、今の生活をあたりまえのことだと思っていたら。今はテレビや新聞やネットでも色々な貧しい国の現状などはいくらでも学ぶことができる。しかしそれだけでは2年生のころの私のように「かわいそう」という感想にとどまると思う。実際に出向き、現地の人とたくさん対話をし、たくさん考えることが大事なことだと感じた。今回の貴重な経験を一時的なものにしないで、考え続けていこうと思う。そして、今回たくさんの人にお世話になり、たくさんの方が私のことを成長させてくれたので、恩返し、または川口さんのおっしゃっていた、恩を受けた人に会えないなどの理由で直接恩を返せないときにほかの人に返していく恩送りをしていきたい。また、私が今回学んだことを私の周りの人に伝えていくことも恩送りのひとつになると思うので、それが、私がこれからしていかなければいけないことだと思う。

### 3年C組 生徒G

私が2回目のセンター訪問で思ったことは、やはり子どもたちは様々な背景や寂しさを抱えているはずなのに、自分のことよりも私達のために沢山のことをしてくれて、私も誰かのために何かをするという行為を自分自身で見つめ直さなければいけないなということです。さらに私は日本人だけで話し合った時に江口先生がおっしゃった「自分たちは子どもたちをかわいそうと思える立場なのか」という言葉が忘れられません。この言葉を聞いて私は去年海外研修でセンターに行ってから一年間、子どもたちのことをかわいそうという目でも見てきてしまっていたかもしれないと強く思いました。さらに今回は多文化共生というテーマでの研修であったため、子どもたちとのディスカッションを通してでは、私達日本人が思っていたほど子どもたちは民族の違いを意識したりイメージをつけたりしていないと感じました。

村でのホームステイは、行く前まではもしかすると触れてはいけない内容があるのかもしれないという不安や、言葉も全く分からないのでどのように接して良いのか考えていましたが、センターと同じようにみんなが笑顔で私達日本人よりも大変な環境で一生懸命過ごしている姿を見て、何よりも自分の置かれている環境を大切にしなければいけないと感じました。そしてホームステイを通して、他文化を知るには本屋やインターネットだけでは足りなく実際に現地に行って、現地の方と会ってでしか得られないことが多いのだと感じました。さらに、一緒にいる時間が増えるほどその文化に対する興味や疑問も増えていくのだと感じました。

最終日のミーティングでノイさんがおっしゃっていた、先進国の人と山岳民族の村のひとでは求める豊かさが違うという言葉が、本当にそうだなと思いました。けれど私達はこの現状を知ったところで改善できるわけでもないと思いました。なぜなら、日本人が求めてしまいがちな物質的な欲求は結局のところ周りの目を気にしているからというのが大きいのではないかと思ったからです。周りの目も気にしながら過ごすというのも、自分に合った選択という枠組みに含まれてしまうのではないかと思ってしまう人もいるのではないかと思います。

